様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２３日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009～2010
課題番号： 21830128
研究課題名（和文）Ｔｈｅ　Ｍａｋｉｎｇ　ｏｆ　Ｉｎｄｕｓｔｒｉａｌ　Ｐｅａｃｅ

研究課題名（英文）Ｔｈｅ　Ｍａｋｉｎｇ　ｏｆ　Ｉｎｄｕｓｔｒｉａｌ　Ｐｅａｃｅ

研究代表者
Ｔ　Ｋｉｍ（T KIM）
早稲田大学・高等研究所・助教
研究者番号：80534966

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本と韓国において変化を遂げるコーポラティストガバナンスのダイナミクスに関する経路依存分析を進めることを目的とする。そのために、政府、資本家、労働者という３主体が、産業平和（industrial peace）の構築に向け互いの利害対立を調整する合意に至る場合の様々な組織的介入経路の比較を行う。また、コーポラティスト理論を打ち出すことにより、最終的には、韓国および日本の政治経済の文脈において国家と社会を調停する学術的取組みの強化を図る。

研究成果の概要（英文）：This research is undertaken to advance a path-dependence analysis of the changing dynamics of corporatist governance in Japan and South Korea (hereafter, Korea), comparing different paths of institutional intermediations where the tripartite actors – government, capital and labor – come to an agreement for reconciling their own interests towards the formation of industrial peace. By staking out the corporatist theory, this research ultimately aims to reinforce scholarly efforts to mediate state and society in the context of Korean and Japanese political economy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009年度	1,070,000	321,000	1,391,000
2010年度	930,000	279,000	1,209,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：社会学、社会福祉学、政治学

１．研究開始当初の背景

(1)本研究プロジェクトの当初の動機として、以下３つの研究課題を挙げた。
(i)第二次大戦後の 20 年間、激しい労働攻勢が渦巻いたのにも関わらず、なぜそうした時代が終焉を告げ、長きに渡る企業中心社会へと移行したのか。
(ii) 韓国は強力な国家(strong state)であるにもかかわらず、ポスト民主化社会における労働需要の発言力を抑えることに失敗し、労働攻勢および産業平和の不安定さの長期化を引き起こしたというのは真実か。
(iii)韓国のコーポラティスト調整の経路はなぜ、どのようにして、国家レベルの三者協議のマクロコーポラティズム（企業レベルに根ざすミクロコーポラティズムという日本の経路とは正反対のパターンとされる）を軸に

進化してきたのか。

(2)本研究では、産業平和を維持するために国家が用いる、異なる(diverging)譲歩に焦点を当てることにより、政策の譲歩と、その収穫逓増(increasing return)ダイナミクスとの因果関係を見出す。それにより、経路依存の連鎖(sequence)のバリエーションが決定される。経済的譲歩は、コーポラティストガバナンスの経路依存の連鎖を促進する場合が多く（日本）、一方、政治的譲歩は、経路形成の連鎖を伴う可能性が高い（韓国）ことを論じる。

(3)また、日本と韓国のコーポラティスト組織に関する歴史的考察では、近代国家構築の先行条件から、民主化への移行および経済危機という 2 つ重要局面までをカバーする。

２．研究の目的

(1)従来の説明では限界があることを踏まえ、本研究では、韓国と日本でそれぞれ異なるコーポラティストガバナンスの経路開発を比較することにより、反事実的視点(counterfactual views)に対する包括的な代替案を提示する。そのために、経路依存理論および所与の歴史的状況における国家、資本家、労働者の横断的関係に基づく歴史的制度論(historical institutionalism)の交点を高める。

(2)比較対象である両国のコーポラティスト組織を巡る収穫逓増プロセスおよびその結果を調査する事により、日本の政治経済は、主に経済的譲歩により収穫逓増が生み出される経路依存ミクロコーポラティズムを示しているのに対して、韓国の場合は、収穫逓増が政治的譲歩により具体化される経路形成マクロコーポラティズムを示しているということを提示する。この 2 国が歴史的経路の初期段階において、類似した国家コーポラティズム様式を有していたという理解を踏まえると、韓国と日本のコーポラティスト調整の分岐に関する上記の考えは、より一層興味深いものとなる。

(3)本研究は、研究書執筆プロジェクトであり、西ヨーロッパにおけるオーソドックスなコーポラティズムと比較した東アジアのコーポラティスト調整の変異形を明らかにし、その歴史的発展をいくつか特定のパターンとして一般化する。この目的のため、日本を初の東アジアコーポラティスト政治経済ベースモデルとして取り上げ、韓国を日本の経路依存連鎖と比較する。

３．研究の方法

(1)コーポラティストガバナンスの歴史的制度論 経路依存の説明

本研究における分析枠組みの 1 つ目の要素は、経路依存連鎖の手法である。これにより、日本と韓国における、コーポラティストガバナンスの異なる経路および、それが産業の平和構築に与えた影響を分析し、体系的に比較することが可能である。政治的譲歩による収穫逓増プロセスは、初期段階において何らかの歴史的状況とともに始まる。そしてこの歴史的状況が、以後の段階の経路依存の方向性と強度を決定することになる。どのような政治的選択が可能かを決定し、また労使関係(industrial relations)の最初の輪郭を形作る際には、先行条件が重要な役割を果たす。従って、経路依存を特定するには、一連の歴史的出来事に立ち返りその所与の結果を辿る行為も含まれる。こうした初期段階は、韓国と日本に共通の国家コーポラティズム期に分類される。両国の国家コーポラティズムに共通の特徴は、政治的枠組みのトップダウン的、権威主義的体系による、強力な国家の社会への浸透、とまとめられる。にもかかわらず、この国家コーポラティズム期において、政治的譲歩の萌芽的兆候が見られた。そうした兆候は、以後の局面において、産業平和を保護する組織として定着していくことになったのである。前述のコーポラティズムの経路を分ける重要局面は、本研究プロジェクトにおける 2 つの歴史的出来事に対応している。1 つは労働関係の民主的改革であり、もう 1 つは経済危機である。これら 2 つは、ある特定の政治的選択肢を選び、その他複数の選択肢を否定するプロセスをもたらすこととなり、産業平和の経路における質的移行につながった―経路依存あるいは経路形成という選択肢である。

(2)コーポラティストガバナンスの横断的関係：横断的側面(transversal dimensions)

韓国と日本の経路依存性の分岐点を検討するための分析的枠組みの 2 つ目の要素は、ある程度の安定性や相互協力を生み出す政治的譲歩を選択する際に、誰がイニシアチブを取るのか決定する労働関係の政治学におけるコーポラティスト主体の権力構造をベースにしたものである。コーポラティスト主体の相互依存性の規模や密度は、所与の社会的および歴史的状況がどのような構造を持つかによって決定される権力関係に左右される。コーポラティズムの経路を特定する上での重要な決定因子のひとつに、どの主体が他に勝る力を持ち、勢力の均衡をコントロールして収穫逓増に関連する政治的選択を決定するのか、という点がある。 このような横

断的関係は次の 2 つの横断的側面からなる。（1）コーポラティストガバナンスのセクター間の関係（政府、雇用者、労働者）および（2）コーポラティスト調整における 3 つの異なるレベル（ミクロ／マクロ／メソコーポラティズム）。

４．研究成果

(1)韓国および日本のコーポラティズムは、国家コーポラティズムから始まった。近代国家構築期（戦前の日本および韓国における開発独裁政府）では、労使関係に対する国家の優位性から、経済的、政治的譲歩の度合いは低かった。しかし、国家コーポラティズムは、組織化された利益集団が重要な局面で自らに有利なように権力構造を再編しようと試みる場合には、その経路を変える力を本質的に内包している。

(2)収穫逓増が職場レベルの経済的譲歩—年功序列型賃金体系、終身雇用、企業年金—に根ざすものであるとすれば、日本の国家コーポラティズムがミクロコーポラティズムへと変容する可能性は高い。なぜなら、経済的譲歩に対する好意的な反応が、コーポラティズムの経路依存シーケンスを促進するためである。

(3)収穫逓増が国家レベルの政治的譲歩—労働者による労働政策策定プロセスへの参加など—により生み出されることがしばしばあるということであれば、韓国の国家コーポラティズムは 1987 年の民主化への移行以降、マクロコーポラティズムへとシフトしやすい。しかし、マクロコーポラティズムは、政治的譲歩が一貫性のない反応や関連する経路形成シーケンスを生み出す可能性があるという意味で、産業平和を常に不安定な状態に置くことになる。

(4)最後に、韓国でいえば 1997 年金融危機、日本でいえば 1980 年代終盤のバブル崩壊により両国が経験した経済危機が、外的経済力に対する高い脆弱性をもたらした。これにより、両国は、「メソコーポラティズム」へと収束するコーポラティストガバナンス構造の修正を迫られた。メソコーポラティズムにおいては、コーポラティスト調整は企業、産業、国家といった複数のレベルで設定される。しかし、マクロコーポラティストモードの労使関係と比較した場合、ミクロコーポラティズムを基盤とした産業平和が、メソコーポラティズムへと変容していくことは少なく、そのスピードも遅い。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

(1) Kim, Taekyoon, "External-Internal Nexus for the Sources of Insecurity in the Third World," *International Area Review*, vol. 12, no. 2, 2009: 61-84.査読有
(2) Kim, Taekyoon, "American Containment Policy in East Asia Reconsidered: A Research Note on the Korean and Vietnam Wars," *East Asian Studies*, vol. 57, 2009: 5-28. 査読有
(3) Kim, Taekyoon, "The Welfare State as 'Shadow State' in Korea after the Economic Crisis: An Interpretation from the Viewpoint of the Voluntary Sector," *WIAS Research Bulletin*, vol. 2, 2010: 29-44. 査読有
(4) Kim, Taekyoon, "The Welfare State as an Institutional Process," *The Social Science Journal*, vol. 47, no. 3, 2010: 492-507. 査読有
(5) Kim, Taekyoon, "The Dual Structure of Epistemological Valuations on International Development Cooperation: A Note on the Japanese Experience," *Review of International and Area Studies*, vol. 19, no. 2, 2010: 67-104. 査読有
(6) Kim, Taekyoon and Myung-Joon Park, "Governance Mechanisms to Mobilize Civil Society Organizations for International Development Cooperation: A Comparative Analysis of Japan and Germany," *Civil Society and NGO*, vol. 8, no. 2, 2010: 185-226. 査読有
(7) Kim, Taekyoon, "Relating the State and Voluntary Agencies in Welfare Politics: A Social Construction Approach," *Korean Journal of Sociology*, vol. 44, no. 6, 2010: 45-68. 査読有
(8) Yi, Ilcheong, Taekyoon Kim, Jooha Lee, and Huck-Ju Kwon, "Escaping from Poverty and Dictatorship: South Korea's Welfare Governance," *Journal of Democracy*, vol. 22, no. 4, 2011. （2011 年 7 月掲載予定）査読有

〔学会発表〕（計７件）

(1) Kim, Taekyoon, "The Sources of Insecurity in the Third World: External or Internal?" American Sociological Association, New Orleans, USA, 11th, August 2009.
(2) Kim, Taekyoon, "Bound to Offend: A Historical Sociology of North Korean Foreign Relations," Social Science History

Association, Long Beach, USA, 12th, November 2009.

(3) Kim, Taekyoon, “The Accountability Dilemma of Global Social Governance: A Note on the World Bank,” International Studies Association, New Orleans, USA, 18th, February 2010.

(4) Kim, Taekyoon, “Contradictions of Accountability in Global Social Governance: The World Bank and NGO Accountability,” International Sociological Association, Gothenburg, Sweden, 12th, July 2010.

(5) Kim, Taekyoon, “The Welfare State as an Institutional Process,” American Sociological Association, Atlanta, USA, 15th, August 2010.

(6) Lee, Jooha and Taekyoon Kim, “Democracy, Development, and Social Policy: Korea and Japan Compared,” East Asian Social Policy, Seoul, Korea, 22 th, August 2010.

(7) Kim, Taekyoon, “Social Politics of Welfare Reform in East Asia: Korea and Japan Compared,” Dongguk University Special Seminar, Seoul, Korea, 16th , February 2011.

〔図書〕（計１件）

Ringen, Stein, Huck-Ju Kwon, Ilcheong Yi, Taekyoon Kim, and Jooha Lee, *The Korean State and Social Policy: How South Korea Lifted Itself from Poverty and Dictatorship to Affluence and Democracy* (New York: Oxford University Press, 2011), 197.

６．研究組織

(1)研究代表者

Kim, Taekyoon
早稲田大学・高等研究所・助教
研究者番号：80534966